



善喜官壽父連歌書抄

紹巴傳記

伊地知文庫
文庫20
254



水谷川本

南無阿弥陀仏

此の巻の巻末に
此の巻の巻末に
此の巻の巻末に

上は下は母と云ふ

水谷川男宮藤原氏

と云ふ

伊地知氏書冊

一 軍村松村氏を移し南都一乗院

師少若松井昌祐の男なり印雅より敏才と云ふ事を知

木東正云々連歌を学ふ云々布を高く富人道徳

を悔念なりといける銀色十三星父死云々後奥

福多明主院の唱念を移し長く更しき連歌を

僧の同柱に学し藤原を名せり同柱より宗祇乃

門人宗碩一を碩と云ふより傳く和歌を三條西右大

臣公條公の門人し別號を柔宿といひ一時は四下を知



らる銀色十九歳より刺媛一因桂子随従して安んよ
好む當的連歌を既好するに好松永より徳大尼子
義正より夢窓一休より高く譽せり永禄十一年九月
將軍義昭公の入京に鐵田信長の少力なれは感銘
こころ燈中より近玉の信人上京して望せたるなり銀色
も連歌師と稱し信長の奉陣東市福寺といふ末彦の
扇を一對進上りてを信長に扇を奉るに ちやん
ちやん ちやん ちやん ちやん ちやん ちやん ちやん ちやん
舞はしむ代より代の扇をと念をつけるを感銘を

此引も相多くあやうししこれより扇を天下に知らる
こころちやんぬ京歌に居位をうしこころちやんぬの玉将也
銀色四十七歳の時ありき天正十一年明智光秀叛逆
して信長を弑せし其日京中より下陸初基く東
宮 識仁の太子
称陽光院 急よ 禁裏より渡御けりてちやん下丁
甲部之連馬にあり信長の家客五七人供奉して
御歩行の路上に銀色はからん集り合はいうも驚
愕しちやんの集り小幡のちやんを急難を救ひ
ちやんを ちやんを ちやんを ちやんを ちやんを ちやんを ちやんを ちやんを
法橋

位より叙せられたる其逆乱の少少愛宕山より先
秀連歌を興行し時々下知る五月廿とよ
能向くと百の整し宗匠はまなると銀色あり先秀
其より土岐氏の人をよ天がいた知るとよを隠すと
いよ銀色に担えつゝあつても知らぬを夜先秀自
おほえに長嘆の身を養やるとも教育もさるゝ
たよれつゝとは知つたれと聊お人こいさるゝもほ
あつゝつゝ信長公の愛をさくさうらひ明智をんと
いよとやかくも山崎の一戦も明智滅亡か

先秀の連歌を世上より傳へるゝ銀色後継は
いよとよい色よひうらゝ宗匠の山しを懐紙を
語も天つ下とよとよを前りよ上つまむとよのさ
ひめつ下知るとかましとさりけあやうゝとさひうゝと
連歌のよとよと人説るゝと先秀吉公の陣官
銀色をよむとよ先秀の連歌時々の
つ下知るとよとよと宗匠のよとよのこらつ
のよとよはあり銀色も其のよとよとよと
いよとよとよとよと銀色よとよとよは時々の天つ下

たるといふとよきつりし懐手とてなりよせし伊流の
とておそくも来るもあつりし急子懐手とて
よせしとてよきつりし懐手とてなりよせし伊流の
よそも狩味ゆきやとひりし銀色神をかへん世何人
のそと一層の連るれとておそくもあつりし急子懐手とて
天下下とてよきつりし懐手とてなりよせし伊流の
と書おそくも来るもあつりし急子懐手とて
とてけさきし銀色神をかへん世何人のそと一層の連るれ
とておそくも来るもあつりし急子懐手とて

とて教と物知りてよきつりし懐手とてなりよせし伊流の
とておそくも来るもあつりし急子懐手とて
よそも狩味ゆきやとひりし銀色神をかへん世何人
のそと一層の連るれとておそくもあつりし急子懐手とて
天下下とてよきつりし懐手とてなりよせし伊流の
と書おそくも来るもあつりし急子懐手とて
とてけさきし銀色神をかへん世何人のそと一層の連るれ
とておそくも来るもあつりし急子懐手とて

登るゝと紅色の服をききよと命をらるゝ志らと
己をん灯の教と下向をたし一帯はあまの業道
の職ふたれは非弁をさるゝととねんといふは業を
公いふは業を多たうともさるゝ威路をさるゝと
いとけうしおかす細川出雲守松平出雲守等
はる古教さうし武術をたし志のたさるゝと
而も業のあらはしあしとといふは業をさるゝ
ひさるれ紅色はさるゝのあらはるゝと業
正し中へあしさるゝと業をさるゝと紅色はさるゝ夜

出雲守のあらはるゝ古教のと據と向ふとさるゝ古教
たなれとさるゝといふは業のあらはるゝと業を
業をさるゝといふは業のあらはるゝと業を
業のあらはるゝといふは業のあらはるゝと業を
いとけうとさるゝといふは業のあらはるゝと業を
見よ供養と

ひけの雪をたええん若聖山と比つたまはるゝと
のあらはるゝといふは業のあらはるゝと業を
多し高野内光山有馬信海五月十一日大板

帰城そのころらるくよとみし和款も連款
の者白しうにく廿十信ふ又禄四年七月秀次公
高野を切腹一月奉納を首をさく一毛違
およむ女房病をこしく殺され又二十二年次
公へ親近しその川原泉をこく羊井玄朔と申
く銀包も流罪を大津へ放られ三年子執事居
やしを松永貞徳多らぬ行りしと志賀有浦や
よと生を死さく故も妻は白やくこころかんと
と銀包よみたりはくしと望年の夫赦免せられり

慶長三年秀右公院研の花見のと記し供奉しと款
よみぬ慶長七年銀包七十九歳秀春六充病治ま
くらざるを自ら知り初生の地南都を院寄をとる
とて法人へ永別を告げ意臨の家を連款を行へ
子ののち 麓なき若かり 銀包 夏山近し雨はく 庭 系臨
子親夕の月よ身傍中坊元祐 一百韻成然や南都へ下り
四月十日松井乙翁の家を死に男玄竹玄伴等衆
舎しと葬禮佛りしこのころ初ふ墓に中院の極楽院
より子煙草石碑を立し名巻を永く後世に遺傳せり

細色 中めの松井氏より京都に遷りてより新上松
村を以て氏祿とせし松を天正十一年十月里村昌休
死す迄は家産家物とせし細色より向後
細色里村を以て氏祿とせし昌休の子昌此を細色の
子とて見ぞだて連歌の家業を承継せしとて細
色とせしかく承継ししれり里村細色とせしを通稱
とす昌休は細川島國の家人里村治より末雲の
男名を寛永とす連歌と宗牧宗養父子とて細
色名り島國滅元の後京都に住し連歌師を以て

りて子昌此知名治より長しは仍景を名とて築庵
を歸しと遂に細色と申す身天より法橋位に叙り
天正十一年秀吉朝臣四位の中將兼鎮守尉に任ぜり
勅旨ありて同辭を以て五位の少将に任ぜりしを夜
連歌張りてとせしはとてとて隆のりく代 兼人の春とまら比
新しとて松を植ゑてとてとて玄方二の時細色へ新地百
石城物上の部を領りぬ細色南都へ退く時知行を
款道秘傳の書し一切昌此に附席の室子玄仍玄仲
ハ自物とてとて細色とてとて細色とてとて永禄八年紀近

細川兵部少輔藤原道隆の日記

兼人

細色

衛前副右大臣左大臣種家公より古今集乃御了と

交傳也一其御立之年の末の句與行のしとせと （しとせと又中つる春

日代（盛）と不冠頭（盛）の考を乞ふ龍山公の父君を常

河近衛左衛門と稱を法師ハ惠雲院と之りこふよりせき

と伊勢物語源氏物語を以て公より傳へり源氏の

銀色抄永く世に傳へり銀色の見ハ南都に住し一宗院

殿より少名恒師を松井道順とよみ天正二年六月十日

此書を悲ひし懐箱の運致を與行也

夏山（山） （本） 銀色一世の長句甚多し家乃

（山） 之色抄き抄本也

集也行へりし付合の句を考へり書獨竹の句句百韻

之句くひり西竹之竹きくハ数人と共く連歌也

古懐箱寫本もまゝにことと稱 昌此の句をまゝく如と

よふひり一六句を死をまゝにひり

根さくし （昌此） 他ありし文路の蝴蝶ぬ

る句 （昌此） 百韻連歌ぬめるは考を銀色一世り送也と

花傳ふに伊勢物語のうきりうゑんハ秋夜を以てやさ

うてん花を散りぬ根ころ枝あやとよふ事り歌を

傳用しと知る銀色の法江高の婦人古集一流と

此よりそのやけが家跡庵と綿を牛利休と
差程を問はせりし初めの利休も、銀色と連
歌を以てし、銀色の門下は連歌に在りし人等へ
かゝり永後主正種宗能宗俊順教清弘保俊
春約文純宗法宗於玉傳時昌壽賢銀九匠之宗
空等の名書を一覧の書、或は亦其懐を以て
稱正の人この郷地を傳ひて、詔をせしむるこ
ゆへ後考に備ふべきとありし、里村の本宗ハ
昌叱文傳一昭代に至りし毎刻大忌の殿中へ候し

銀色は兼部と云ふ家の縁而石田の思ふ如く
是刻より十口の食俵を分り連歌の時とは又復
給物有り、毎書初数人の連歌を引出し春竹関
口の慶儀もこれと奉りし、又里村を稱するもの子
弟数人庶家まむしおのく十口の食俵を分り連歌
師を以て、其家を行はせ昌叱の弟口口琢名、景敏等
ハ竹庵ハ竹齋又ハ懐忠菴孫北菴と云ふ、室長有
南里之室長有る也、又思の父昌叱、亦これ銀色
より直傳也、とも多し、其安の新文を細釋し成

高正と数とあり慶長八年臣比死後家
主は盛とて後水尾天皇より花下の舞
舞を拜りしなり 勅許をうりしへ宗隆松師
乃種王若くは梅花若くはよりしりく同くあり
時人花の下の連歌所とんれいと云載り花の下り
宗隆とよふ勅舞をたよけりかへて然仁の云乱
以来連歌所と廢花の下の稱も絶軍を
銀色中興とて大業通をいへり昌比昌政とて
美名を世に流るる連歌所の故をいへ花の

の舞を里村の家より勅舞ひりて長くこれをいふと
と稱れり天下に傳ゆり美傳おしあしとありしなり
元寛永十三年昌政死し昌隆昌陸及夢を墮
し昌隆の書はは時より行りしとて次昌隆昌迪
より世を歴る今の昌隆は傳へ法格を叙し後年
昌隆眼を道と云又銀色の二子玄何玄仲二家と
なり 亦里村と氏稱とに二人共より高時と云ふなり
玄何の子玄陣も昌隆の養を取る玄仲の子玄的も
昌隆の養をとりし一家は京より一家は大阪にあり
同く

大天の幕府の連款仰と稱し十口の食俸と二家
ともお多し敷世を度し今の里村玄里にお讀
り毎美の連款和江戸とて別々すし知ると
ろと更くとよ南都の松井に其家より銀色を寄
款とて家々を承りしとよまると兄弟とて子も
連款とてしよりなく後世に傳へて其家々を承
るれとて連款とてしよりなく今の浅香山道守
に至る其の家南都の寺より一より銀色を交と稱
と古本名所記八重松等の証書にも銀色を交とて

稱し銀色の小傳をのせたりと銀色の墓ハ松井法
掃と忌辰の佛子を行ふ宗和元年四月銀色二百四
ハ里村昌逸を後を命と懐旧力千句の連款と
張行巻紙には白とせとてこれを同子規昌逸古記離よとけ
卯花正世有明の祝とて夜の釣巻巻と名前 飯吟の文
追加のそのいの尚卿水がらほとて連が尚卿夕系とて一は舟のうち壽之
以懐妙大徳寺正之院の廟前へ傳へし中書のおく
りてしとたもをんる然ハ則大徳寺中より石塔りとの
ありとてよの尚卿とてし南都の惣寺家石井傳と

世に連歌を好む昌遠の門人にして亦中より不祿多し
喜之と云ふハ一條院政の御里坊末代昌守職を
領し中野真人よりこれハ松平軍卒道議の男を
其家より出せ別氏を称せしと云ふ所松井の主たし
うなむるをたし此服句ハ真人の名を也也一と云ふし
連歌を學びし人とはあるハ又南部一七昌遠下向
一七銀色の著るまゝ極楽院を連歌と行ひ松井
一七といふ事終るも亦向し亦向の中書をおくしと
今も傳へる喜前永享二年辛亥二五五十年と當りぬ

事終るもいづれにやと云ふハ今に今の里村末代
事終るも一七著るをたしと云ふはた、松井よりか、
のそと佛子を行ひしものことこれ古のこと連歌傳子
行へる天下の所風をんはたと銀色やその大案在
まほふんも誰某り遠忌を懐舊の虎秋伝
予よ與行をくわしを今時ハ大と云ふ天下のそ
のそとらも連歌の吟詠と云ふ銀色は遠忌と云ふ
れ一人遠忌を南於くすを著るまゝなりと云ふ連歌を
今も傳へる喜前永享二年辛亥二五五十年

をよこし二百四十遠志をけりて復つてひんせん
これを歸して後人よみ送ることをしり

一 伊前公言第の備へる元奥志の慶跡高坊タカノ坊住に
南都井上河合も小菴のあり佐伯の菅原氏別
邸と芦筆イ筆作又第中巻とよけめ、泉坂坊の
津子住して連歌を牡丹花宵栢と學ひ古今集を
傳授せし或ハソノ牡丹花の門人等イ心電作忠と學びた
りとも伊子銀色とそら唱和あり故に銀色の門人とし
つり一時連歌り喜登る多し遺巻多し壽賀宗於

う佐志といふの皆連歌師を銀色の門人と云ひ伊子
といふは高坊の位を一人にたは心前の門人を
ありし永禄九年松永淨住の所久秀多門山
の城を築造する用を南都中と云ふ石碑新古とい
はすことく存去る古より高坊の境内より古
曲玉成公の古志石あるを心前のとあるをきく
はるひなることをしりし松永もよりの連歌を
好む人をも毎夜に連歌の席へ心前を志し
これを行ひしを御し引のし

あまや花さくらの竹心前

辨正或ハ半松齋と書ク宗紋の男ヲテ南都

斗アリし元日ニ也格リし礼が系がまゐひ代と不句何れ一時

そりはやせりまゐりのこせ宗養風多ササ

信宗宗養これら南都まゐりし日の他此か

宗長宗長南都まゐりし水鶴宗長と不究

句と慈尊院まゐりし此の宗訊といふ

この慈尊院まゐりしの連弁源山是

香が宗訊と不究と感宗保とる宗也宗七宗日宗院宗と

た宗り宗す宗と宗春宗の宗え宗い宗と宗不宗究宗と宗連宗弁宗也宗と宗い宗り宗

又日院の危宗る宗杉宗乃宗大宗木宗坊宗り宗を宗伊宗勢宗岡宗日宗小宗鬼

力宗乃宗の内宗危宗れ宗と宗い宗ふ宗と宗究宗也宗

故宗し宗伊宗勢宗岡宗日宗小宗鬼宗と宗い宗ふ宗と宗究宗也宗

連弁宗一宗巻宗取宗乃宗危宗れ宗と宗い宗ふ宗と宗究宗也宗

これ宗ハ宗信宗南宗院宗僧宗正宗なり宗喜宗多宗院宗有宗空宗度宗大宗僧宗正宗也宗

と宗い宗ふ宗と宗究宗也宗と宗い宗ふ宗と宗究宗也宗

東地宗井宗祐宗範宗大宗東宗延宗種宗西宗師宗岡宗の宗他宗名宗を宗得宗り宗

多宗し宗市宗中宗と宗も宗亦宗作宗者宗数宗々宗也宗

一宗宗宗院宗版宗の宗言宗主宗世宗と宗連宗歌宗と宗長宗を宗也宗と宗い宗ふ宗と宗究宗也宗

孝^第と改めたるは楊の一字を連音して用ひ世に高
く知れしむるに近衛氏の龍山公の男ふえ准
三后、また界道一と以ては下は中臣左京亮
元知も頗る名なり二名も是れ親王ハ柘の一字を
用いたしありこハ後陽成天皇なり中子なり二名
貞^一敬親王ハ柘の一字を辨とせり 後水尾天皇
の御子なり二名も是れ親王ハ柘^初字一字を辨とせり
聖光天皇乃中子なり此四皇は連音はなりしは
在相をよくし書を善し柘公ハと詩を善し

たまた柘公ハまゝ、柘公天皇の御孫と正定し
是字を字とせり法帖と然とせりは浄書と加墨
一のふりしり勅命と之奉承一カひき臣下
には少倉保胤詩歌連歌とあり書と柘公ハ
は他人の教多しとせり名氏と略し古は
はとて又風格なりとて後年次第ニ表は
是と今日も一陰一陽の第一ハ後述は天理玉環
の端なりとてやうこころ高格な後述は中興
の事とせしむるは中興の事とせしむるは

字を識らば人なく字とんと能くは古なり
うらりの書存に鑑めざるはなしとされはよく
そのよくこれを用いしは多うまうと志思古人
と似たりとせざる所と能くは古人に用き
連きはかりとせざる所と能くは古人に用き
年おととのに儒教の人と又、新教書屋の花
刀鏡ら多のちやを智徳也、之を以て天下に世に
称せらるゝよき多し猿樂妓東園芸蹴鞠掃
花噴茶の事とも亦同じ天下に世に
平佐一

人志まなく喜ぶ事ありとてそろそろにたかりけり
とてまじりて執候の中よまれ一人の情懷を以て心とせり
中への近きもこのよき精巧を窮るは密なること
其物をよく擬作しそるをよく擬行をそるの権行
書きよく後を擬譯しそるを國の法を彼も通用
よきものなりとて知りしものなりこれをもては
そるをたかりこれを行つ神一人のそるをたかり國を
傳播し後進の人精巧なること信するも多し今日
よきは都早ともて聞しといははたそるを

邵康節の天律格上の杜鵑の情を稱して未だ
を思ひしは好いと云ふ——一旦苦寒の大船洋中
出沒多かりし悔渡の臨防の成を云ふと云ふ——と
形もさういふにかるふ祥の雲字も新字をよ
ろふふ人情を志力たふす——たんは遠を去る
感をもとくたふしものをこれとはをわけかけたる
連寄り今大に意をこころを古に復して燈はしめ
ん人方もよむは口を——連歌も今再興を
新寄りの一子もそ天下の人情傾くはとよむといふ

いふ人連寄りの隆盛の言中山崎宗鑑俳作
新寄りを興えし一時の名高きと云ふはこれ
もて感是ともり 松本貞徳がめを俳諧を定
有しと後世俳諧の祖と稱せらるる——松本貞徳の
守衣けりて後世 北村季長のけりてこれより皆世に
いふ人連寄りも毎勤力せりすと俳諧は
連寄りなり一書也——と云ふはこれといふは連寄
りといふと稱し世にの言はるるそのひ連寄りを俳諧
と稱し故に連寄りを古より世にの言はるる情を

俳風をいふは嬉し俳諧も亦正しくいふるを俳
言俳意なりと嬉へり離れ立圃西山宗因はめ
語予一家をなほ俳人多し言水鬼貫来山三
糸風不世を弄へからんことよりたけま名も亦い
なりからん松尾芭蕉伊勢よりいへ天下を遊歴し
俳諧を一新して嬉を以て倚格を定め自らこ
れを一流と名り山人甚難く天下の俳諧風を愛
し今更に一掃して餘韻を傳ふ故にこれより
祝するもの四年又翁といふを以て稱は芭蕉は俳

諧のよの安を巧くして嬉ふと安は是も虚也
一とて安をいふは一流の流基なりといひ連寄
いふは皮を脱ぎ嬉を好むは實情を好むといふ安を好
むは今時より連寄と俳諧といふをいふは嬉と安
とのけちめをいふは嬉を以て今より連寄は俗言と
稱して嬉ふといふと俳諧と稱する事とすし俳諧
より亦連寄と稱する事と稱し小野の宗匠
能順の句は秋風はき記吹ちる夕かなといふを秋
風子と改めは俳諧ありしと芭蕉よりすし

坊の誦を以のまぢぬえとは連言し後部乃
以まぢ誦のまぢぬえと之に俳諧なりと階唐宗
安情の別を以はまし俳諧師香林連俳互
照もつ橋のうつり心や石とまじるといふ連言の
俳諧し石とまじにけうせはまぢも若槻と之に俳
諧の連言しといふ俳諧盛にけうせはまぢ七道地と
してこれを玩する多く近來ハ大くいた、卷のつきの
正と稱えし巻のの大集を常たえんこれに評
判正言を宗道と稱し生彦の一助とまじるといふ

とよ書しとまぢといふ種より窓聲をまじ若に三
笠付と岩林をまぢけ肯くよは刑四行をれし
右字甚獨後の書をまぢる一和歌の境を末変
しし物垂と極へしとは信若玉埭の神といふ
の知れえせん法まぢかたけふ俳諧の災あるん
やといふ俳諧を好む人よたれ人をいさふまぢ
むとまぢるそまぢる喜彦の正法のこと形をまぢし
空法より連言大に哀し今ハ創地を耕えん
まぢるはうなり俳諧の歩を誠とやんまぢる心
うつり

かほりしや又狂歌と云へ 門戸を開き一ハ八幡の
お花柳江戸の羊井ト養むらやけめおらん
うへへり島石の歌人連哥師時或ハ戯世
俗の子を俚言と云へいへる幾らもひれとろ
ハ狂歌を云へ稱えきこひん雲上の鳥さり
詠を云へト亦云かり大坂の朝心貞柄狂歌一
流の宗匠を川人ト甚多し亦云りそ亦盛ふこと
ハなりし南都の漢月庵宵眠は俚陋に過た
れと云り迴文折々の歌詠詠教を云へお後

比阿といふ江戸に蜀山人あり飯巻と云歌その他歌
人なり云く古調を云へ行ふことなりと雷阿
の吟徒京故法も多し俳諧歌と稱し今振
歌と稱し古風の和歌ハ勢繁に近キ次ハ狂
歌を云へト和歌を稱しよの云へ今の時
三歌詠國和歌古流多し古作近作の二稱は
と師傳の傳を云へ歌政と稱し近作ハ大歌詠
ハ風格地下に落し雲を云へよの云へ今時繁
茂華歌詠香の草樹等の新調を徒多し古作

經仲東鑑を初ると真倒中陸の事流板東に
数戸をふつ京は萬層巻せ居蹟の徒富を名成
幸師杖等の門人帳を張る者大かんに大板は
下好造有契の家く改る法を以て教ふ是へか
とよ四言三流傳傳る伊路の中長官長う考古有
後書諸辭の訣これも亦下流の衆見一板亦は
詠竹の風しまらくも左平の夢調はる春庭有
音韻はうたれはころ下下の人古も今も日物を
賦一と回言形さうな天のほしはうぬへし地理

をよるへかかんましとゆ人心人面のことなるは後史に
愛動我致を知りかんに連考をとも同下りぬや
連考は所謂近作の款多水古を好むとを松
を云ふにべきまははは及名文字を用ふるも近作
通用のともあり格としさりさし古作しありこそが
けしを知らされは近作の近作たるを理合を
からん坊々知る上も知ほこり用法自在
らる和考連考俳諧狂歌の世風上追隨
一と移り換り来り盛衰と下り略して時運を

知らぬ人か何れか今又連考の衰運極る
とや謂ん然れは是れ復盛なりへき矣臨して
英雄豪傑志を盡し名を揚す時なり以時
予に誰か連考と學ぶ人寧ろ鶴口と多れ
午後とすると初れ小道と之も親りて
正の所り也ほたる屋久也

